

ホンデユラス国の養豚事情、寄生虫病およびAujeszky病の調査

平 詔 亨

(農林水産省家畜衛生試験場：〒305-0856 茨城県つくば市観音台3-1-1)

Taira, N. (1998) Situation of Pig Husbandry in Honduras and Investigations on Parasitic Diseases and Aujeszky's Disease. *Proc. Jpn. Vet. Soc.* 34: 1-2.

はじめに

「ホンデユラス養豚開発プロジェクト」は、畜産局・家畜改良センターを核として1993年5月より1998年5月までの5年間のプロジェクトであった。この間、米国より種豚182頭を輸入し、優良種豚860頭を生産しホンデユラス全土に配布するとともに養豚の技術移転を計った。プロジェクトサイトは、首都・Tegucigalpaよりグアテマラ方向220kmのOlancho県Catacamas町にあり、筆者はここに家畜衛生担当として、最終年度にあたる1997年5月から1年間滞在した。ホンデユラスの養豚事情、豚の糞便検査による寄生虫病の調査、TegucigalpaおよびCatacamas屠場における囊虫の発生状況およびAujeszky病抗体調査等の成績を述べる。

1. ホンデユラスの養豚事情

ホンデユラスの豚飼育頭数は60万頭にすぎず (FAO Yearbook, 1996)、養豚業と言える畜産形態にある農家は極めて少ない。かつての日本に見られた「庭先養鶏」と同様な「庭先養豚」と言える。豚は居ても豚舎は無いのが普通である。多くの農家は、土着豚・Criollo 3~10頭を、家の周囲に放し飼いにしている。Criolloは黒毛で1対のニクゼンを持った純粋?な土着豚もいるが、多くはHampshire, Duroc, Landrace等との交雑種であり、毛色と姿格好は様々である。豚は生ゴミや野草を主な餌として、特別な飼料はほとんどもらっていない。豚は草食獣であったかと疑うほど、道端等の雑草を鼻鏡で掘りながら食べ歩いている。目は光沢があり、軽快な足どりで野原や街を、子供や犬とともに走っている(遊んでいる?)。豚にはユートピアかもしれない。筆者の目には、豚は「飼育されている」のではなく、本来の強い生命力を発揮し「自活している/生息している」と映る。第55回研究集会では、人家や道端でおおらかに生きる豚の姿を、写真スライドで紹介した。

2. Olancho県における数農場の豚の糞便検査による寄生虫病の調査

ホンデユラスにおける豚の寄生虫病の一端を明らかにするため、Olancho県のいくつかの農家を訪れ直腸便を採取し、糞便検査を行った。調査豚は、フェンスのない「放飼豚」およびフェンスがありコンクリート床の「舎飼豚」の2つに大別された。放飼豚はCatacamas屠場に搬入された豚(屠場豚)、Catacamas町の小農家6戸の豚(Cat豚)、Toro Muerto村の複数の農家の豚(Toro豚)であった。豚舎豚は、Catacamasの1農家(H養豚場)の豚であり、いずれも25頭をリング法で検査した。検出された寄生虫卵は豚糞線虫、腸結節虫/紅色毛様線虫(腸結/紅色)、豚肺虫、豚回虫そして豚鞭虫であった。優勢種は、屠場豚で腸結/紅色が18/25 (72%, Max. EPG=33,300)、Cat豚で糞線虫16/25 (Max. EPG=198,600)、腸結/紅色18/25 (Max. EPG=4,900)、Toro豚で腸結/紅色19/25 (Max. EPG=18,700)、豚肺虫11/25 (Max. EPG=400)、そしてH養豚場では少数の腸結/紅色、豚回虫、豚鞭虫の虫卵が検出された。全体としてみると、腸結/紅色の濃厚感染が特徴的であった。なお、プロジェクト内の豚には、特に問題となる寄生虫等は認められなかった。

3. TegucigalpaおよびCatacamas屠場における豚囊虫による月別廃棄件数の推移

ホンデユラスの豚における最大の衛生問題は、人の脳囊虫症(cerebral cysticercosis)をひきおこす豚囊虫の存在である。豚囊虫による廃棄率(=陽性率)を調べるため、ホンデユラスの首都にあるTegucigalpa屠場、およびCatacamasにある小さな屠場を訪れ、屠畜検査に立ち会うとともに検査台帳を閲覧した。検査は、原則として下顎、肩、腹部、臀部の筋肉に刀をいれ、さらに心筋を約1cmの厚さに切り観察していた。Tegucigalpa屠場では、1990-1997のと畜台帳から牛および豚のデータを調べた。その結果、月平均の陽性率(陽性数/屠殺数)は、牛囊虫0.078% (3.09

／3,979)、豚囊虫2.68% (82.42／3,071)であった。また、Catacamas屠場では、1997年1月から1998年4月までの豚の検査台帳を整理した。その結果、豚囊虫の陽性率は1.45% (6.38／441)であった。なお、プロジェクト内の豚に、これまで囊虫は認められていない。

豚囊虫症の問題の根源は、家畜衛生ではなく公衆衛生の分野にあると思う。冒頭に述べた土着豚・Criolloの放飼状態を考えれば、ホンデユラスにおける豚囊虫症の存在は、極めて当然である。さらに人の生活排水等を生活の糧としているような豚の摂食行動をみれば、今回示された豚囊虫の感染率1～3%は、疫学的観点からの予想をはるかに下回る数値である。このことは、人の小腸に寄生する「有鉤囊虫の成虫すなわち有鉤条虫」から排泄された条虫卵が、野外で比較的短期間に感染力を失うことを示唆する。

4. ホンデユラスにおけるAujeszky病抗体陽性豚の確認

豚の衛生検査の一環としてAujeszky病 (AD) のLatex凝集反応による抗体検査を実施した。その結果、プロジェクト内の豚は陰性であったが、近隣の農家の土着豚・criolloに陽性豚が検出された。プロジェクト豚に対する防疫対策の指針を得るためOlancho県における豚のAD抗体検査を3村、計238頭の豚について行った。その結果、抗体陽性率は20.2% (48／238)であった。しかしながら、ADによると見られる流産等の病害は確認できなかった。なお、1996年8月採取した保存血清にも高率に抗体陽性豚が認められた。これらのことを考慮すると、ホンデユラスにはかなり以前から、広くADウイルスおよびAD抗体陽性豚が存続していたものと推定される。

5. 謝辞

ホンデユラスにおける前記の諸調査は伊藤政美・リーダー (家畜改良センター宮崎牧場)、新 晋一・飼養管理担当 (同牧場)、屋敷祐子・飼養管理担当 (青年海外協力隊OG)、糸谷 亘・業務調整担当 ((株)開発と環境研究所) との共同によるものである。囊虫調査には、P. A. Mendosa, J. L. Salgado, O. G. Sandoval, D. M. Castro等諸氏の全面的な協力を頂いた。また、AD抗体調査開始は、短期専門家の菅原茂美・病理検査担当 (茨城県) に端を発するものであり、AD抗体の確認には、家畜衛生試験場の山本孝史部長、山田俊治・山中典子両技官の援助を頂いた。厚くお礼申し上げる。

6. 参考資料 (ホンデユラス滞在中の筆者記述資料)

- 1) ホンデユラスにおける三日熱マラリア2期発病1例と早期治療3例の臨床症状の推移と考察、熱帯、31, 79-90 (1998).
- 2) Hondurasだより(1)概要・都市・交通・動物の往来、家畜衛試ニュース、88, 9 (1998).
- 3) Hondurasだより(2)田舎の様子、家畜衛試ニュース、89, 12 (1998).
- 4) Hondurasだより(3)続「熱帯における長期滞在のサバイバル」、家畜衛試ニュース、90, 10 (1998).

7. 追記

本プロジェクトが完了し日本人専門家全員帰国後5ヶ月の1998年10月30日、ホンデユラスは不運にも歴史的な天災を受けた。詳しい被害状況が不明である現在、現地で働くプロジェクト関係者の無事とプロジェクトの維持・継続等を祈るとともに、ホンデユラス国の一日も早い復旧をお祈りします。一方、ホンデユラスにおける獣医師は総数として僅か120人しかおらず、養豚を含む畜産関係の日本人が活動する余地は大きい。